

エドゥアルド・ヴィヴェイロス=デ=カストロとは誰か

ペルスペクティヴィズモの思想を中心に

佐々木剛二(東京大学大学院総合文化研究科博士課程、日本学術振興会特別研究員(DC2))

現在、イギリスのマリリン・ストラサン、フランスのブルーノ・ラトゥール、そしてブラジルのエドゥアルド・ヴィヴェイロス=デ=カストロなどの仕事が、各国の人類学者たちの思索の土台、あるいは共通言語となりつつある。

しかし、この三人目のエドゥアルド・ヴィヴェイロス=デ=カストロ(Eduardo Viveiros de Castro)に関しては、他の二人に比べて圧倒的に情報量が不足している。というのも、彼の主著であるArawaté: Os Deus e Canibais(『アラワテ: 神々と食人者たち』1986年)が、From the Enemy's Point of View: Humanity and Divinity in an Amazonian Society(『敵の視点から: アマゾンの一社会における人間性と神性』1992年)としてシカゴ大学出版会から英訳されている以外、その仕事の多くがポルトガル語で出版されているに留まっているからである。英語やフランス語を理解する日本の人類学者にとっても、限られた数の作品が残されているに過ぎない。これは、世界的な潮流と対話しながら新たな人類学の実践を探求しようとする研究者にとって大きな欠損と言わなければなるまい。

一方、ブラジルにおいては、ヴィヴェイロス=デ=カストロは既にブラジルで最も重要な人類学者の一人として強い影響力を持っているが、近年、その膨大な著作のうち重要な9つの論文(及び1つのインタビュー)を集めたA Inconstância da Alma Selvagem: e Outros Ensaios de Antropologia(『未開の魂の不定性: 及びその他の人類学的エッセイ』2006年)や、自伝的要素のあるインタビュー集であるEncontros: Eduardo Viveiros de Castro(『邂逅: エドゥアルド・ヴィヴェイロス=デ=カストロ』2007年)が出版され、その業績が立体的に紹介されつつある。彼が発案したWiki形式のウェブ・プロジェクトである“Abaeté”及び“Amazone”にも重要な論考が掲載されているほか、メインストリームのメディアでもその公的知識人としての活動の一端を伺うことが出来る。

本発表では、このヴィヴェイロス=デ=カストロの略歴、及び仕事の概要を紹介した後、彼の理論の核心となっている「ペルスペクティヴィズモ(perspectivismo)」の考え方について詳しく論じることによって、その思想的背景や理論的射程に言及し、関心を持つ日本語話者の研究者たちの議論の発展に資することを旨とする。

特に、ヴィヴェイロス=デ=カストロの仕事を理解するためには、ブラジルにおける先住民社会を巡る状況や、日本や欧米のそれとは大きく異なった人類学の社会的役割の問題に関して、若干の注釈を必要とするだろう。発表者はブラジルにおいて先住民社会の構造主義的研究を実践する者ではないが、一介の入門者としてポルトガル語、英語、フランス語で発表されている彼の論考をもとに、解説を行う。

本発表では第一に、1951年にリオデジャネイロで生まれたヴィヴェイロス=デ=カストロの略歴、及びXingu上流を中心とするアマゾン諸社会における彼の研究の全体像について紹介を行う。次に、彼の仕事のエッセンスであるペルスペクティヴィズモについて論じる。ここではアメリンディオに広く共有される「単文化主義・多自然主義」(monoculturalismo-multinaturalismo)の世界観とその人類学的理解を巡る彼の理論化を詳しく追う。ここでは、アマゾン諸社会での民族誌的記述と共に、ジル・ドゥルーズ、クロード・レヴィ=ストロース、そしてモダニスト詩人であるオズヴァルド・デ・アンドラーデの「食人者宣言(Manifesto Antropófago)」の思想との関係が言及されよう。最後に、彼の議論が、ラトゥール、ストラサンなどの知見との間でいかなる関連を持っているかを論じつつ、ヴィヴェイロス=デ=カストロの分析言語がブラジルの外で人類学を実践する研究者たちにとってどのような意味を持ちうるかについて言及したい。

【エドゥアルド・ヴィヴェイロス=デ=カストロ、ペルスペクティヴィズモ、多自然主義、
ブラジル人類学、アマゾン】